竹林抄 全

伊地知文庫
文庫20
86

文庫
84

伊地知氏書冊

文遠河ハ昔武人の名所
し人言葉ヲ柳ノ花山も
法皇人麿ノ御ものいろふ和歌集
ヲ始めらるし笑基
後ハ歌道ハ道とゝてわそひ
を分し陸ハ風雅ふ
ヲ始ハ人皆代ハ
作ことゝ柳ノ系ふ
角ことゝ百ハ
や内ハ人一ノ祈して勅
撰人一ノ集ヲわこうかき
内いこと歌ノ祈ノ歌ち
かき世ヲ
歌路後集を

おのゝ
ことゝ
勅撰の和歌
たゝ
かり
おろ
ゐて
十巻
ほく
うく
く
さめ
應仁の大乱

おのゝ
ことゝ
勅撰の和歌
たゝ
かり
おろ
ゐて
十巻
ほく
うく
く
さめ
應仁の大乱

ことゝ道の
ゐるのゝ
ゝ
計
おほ
ゝ
ともゝ
原
寛
世
十巻
似
ゝ

竹林抄巻第一

春連歌

ふりにし年の春の夜の夢の内の春の夜の夢

法師宗砌

春立つ山やまの霞の夏

春の日の山の霞の夏

春の日の山の霞の夏

春の日の山の

白ひすくさする初花
春の雨に水の明日新　秋房
うらうらとうらうらとする
篠目の初八山の霞　宗砌
わくらはや春の里人
夜さむ山そなれる初霞　翠盛
不〻不乃面人里
立こむ風霞もたん小月出て　宗砌
夜石に小月出て鳥うつ
夕つゆ〻〻梢の野辺小霞　心敬
ひ〻かさを〻〻和歌
初霞原山に霞まん沒まうて　寿久
いひとりいのとてうり
祈りの手霞不〻海苔新　心敬

凡うつきわをる秋風信
永をあををの〻今もむ秋山　宗砌
こゝろかなる白つゝさ木本
毎よりふもも八浦本の霞、
紅いをと初〻も高寸霞
沒〻〻すめるひ〻八山凡　翠盛
木八下をゝ〻ほ〻嶺
松〻ふ風吉〻〻木海、
沒凡〻に〻の高〻高〻
ゆりふ〻すむ紅海を山　心敬
今も秋風注〻すとん
日新さ沒高の川原風初霞　智蓮
山けをゝ〻ゝとゝる山
星八の河すわる高川　寿久

春の月ものすごき梅の香
笛の声の若草を今匂ふて　宗砌
風の吉野の春の空
神なびせしさを花ぞ咲ける　盛敬
霞の上の野辺の今の京言葉　盛
を清水ぞ流れ山の
清水の流の山の花の京ぶて、
日ぐけの風めぐる面の初風　宗砌
出ぬ山の言葉の京言葉
奥面て山の後くるる
苔紙の京言葉を堪一言葉て、
うの月の今の
雲の上の月の
春の嵐の山の
せきの月の大井の
この年の
石門の後きかいとや
後や流は
ほらの
梅の香
月の
梅の
梅の
梅の
梅の

宗砌

宗砌

盛敬

盛

[illegible]
梅ちる暁とうぐひす　紀貫之
[illegible]
[illegible]
[illegible]

果いかに野に人霞れぬ春

下京の人家の家ずゑ白き春の面　宗祐

花の人をしくこそ霞てこれなれ

若こかさ家の四歳も色て　きく

年くれの春いかく小海道

家の家の前ちかく白梅、

いたく清かし雪の降る道

花小田の春の春の花を伝て　心敬

ニ四日の情き神の梅香

小田の人の山里の麻衣　賀蓮

風のもとの人の山の春の花の力て　宗祐

汀の田寒の春やちる

御所の春の白こそ清の春小　紫塵

明けそ初の白雲

澄沒なる人の春面の暮く、

風ちりなる花の命を人

春面の若菜のに月ありて　きく

春の人の花の吟

久堂の春の月いなるこそ　宗祐

ちれ田の色のいき春の

清の家の春の月ありて　きく

春いかて花の

花われいの月の春の月と離れて　紫塵

清の人の浦の春の色小堂の

わしやいかくちかりの月、

三つにすの春の波

花の家の家の月の　心敬

芳浦さて春の月出
月のすむ清川瀬の春の色　宗砌
風ふきさえ冴のかすみの長閑
すむ心なしの月の遠小梅をまつる　心敬
霞春の月はまだ雪の下に消ぬ、
春の色の春のうつりさ
なのくるをまちて春の来れ、
人を思ふ琴ゆをまちて明ぬ
春雨のふりて紅葉は色ぬ　紹巴
ふけぬ春の雨の音ぞ
山ひめの袖にぞ紅葉
かつしるる　智蓮
高い声する鶯さえ
高い声するわさを紅葉て　紹巴

ぬるる山ゆくりの人のうらん
ぬれもあの梢ふるに紅葉て　紹巴
日毎に
日本こる
紅葉は梢の枝ぬれ、
かつ山の位ぬるさひさ
高い人のかしに本に紅葉く　智蓮
松の葉の紅葉
高い花の野原に本来て、
山の山の人に
さいてたる
森の人しるる紅葉　紹巴
人の見の国の昔の村の紅葉て　智蓮
ぬれぬ
高い花一紅葉

奥山行て春秋うち乱れ
鳥の鳴初めの初音聞て　豊盛
心地よう易のうぐひす
咲花を木の下に拾て　紀四
一花てうたうの人とうぐひす
稀咲山を人の川の水に　敬
流て今東へ流るる川の水
花咲山の谷の川の花の鶯
山の宇治川の花の鶯
舟の上の日の入れと花咲て　賀盛
今うらうらの心地すく
花さそいつつ人の心ふかき
鶯と人と家なつかしき　紀四
咲初めて林をとづれん　為吹

遠近人家
鶯の言葉
山稀に里の易のうぐひす　紀乃
霞の中の山の下道
易の花の花の花　賀盛
人の花の言葉の道
うぐひす鶯と花の鶯　為吹
鶯の里の七夕
天の川文野の紅葉して　敬
舟漕かりの花の花
白雲の生の藏の花の花　宗初
猿沢の人の人の
白川の山の花咲けり　為吹

明なる器をうつしたる
ものゝ花をんなの位拾て心敬
庭てまの木の花中に見わる
山桜や花八月の富春とし 宗祇
をさ月雨神の春とうの
花売小ゝり 心敬 ちんや 賢盛
ちるを春いかなる
夕月雲及乃ちれなる
古寺の花八月 ちる
ゆくとして
山桜花を
さくる年も
山りい花と
八月さい
花八月

越をいくるし 江ちん山道
花ゆ月雲りや 雲 然乃
ちる木作るなおさ
山〳〵桜花てそ 賀
春ゆ三八月すめる
山里八月ゆ
かけるゆ
花ゆきて人
涼をおけ
花を見ゆ 心敬
野原城い
花白山
庭こめ
八月花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]り人の来て新しく近衛
入道殿の花見に春の花 行四
高雄の吉野に言はせてこへ
花の木に花のうつり山風の吹 賀意
山の谷の谷の[illegible]
[illegible]花に花の木の色と人の染りて 然行
余ほのぐ[illegible]
桜木に花咲いつるとうつり花
わが宿の[illegible]
思ひ初め[illegible]
[illegible]花と[illegible]山風 賀意
春の来る[illegible]
[illegible]に[illegible]
春の来る花の[illegible]月 宗砌

[illegible]
花の春[illegible]明かの月 行四
[illegible]月の[illegible]
[illegible]近き花の[illegible]て 賀意
春の来る[illegible]第月の朝
[illegible]花の[illegible]て 心敬
[illegible]
[illegible]て[illegible]の[illegible]明
花の[illegible]雲[illegible] 賀意
[illegible]の春[illegible]
花の[illegible]野への[illegible] 宗砌
[illegible]花の[illegible]
[illegible]
人の[illegible]花 然行
花の[illegible]
賀意

いとゝせんさ遥るまれ

わすれてしそれとへさ霞の中 寺歌

あられ雪風さへきえぬ外

かわすりさ須ゝ霞の間にうゝて、

山霞ゝかりはる枝ゝ

藤ゝ橘ゝ風かゝ匂ふ 景

色ゝ心ゝうゝと

色ゝもむ霞と 心敬

袖ゝ香ゝうゝ春ゝ山ゝ 賀茂

見ゝて海る山ゝ霞ゝ

もゝて流ゝ月ゝ見る雲

人海る山ゝ海ゝ間ゝ霞ゝ花ゝ下 心敬

今宵ゝ月ゝの山ゝ

雲ゝ霞ゝ

花ゝ梅ゝ流ゝて 寺歌

霞ゝ春ゝ山ゝ

又ゝ春ゝ山ゝ

霞ゝ春ゝ山ゝ越ゝ 寺歌

わすれゝ山ゝ

又ゝ見ゝ霞ゝ春ゝ山ゝ 賀茂

春ゝ山ゝ

霞ゝ春ゝ山ゝ

わゝんかゝ

流ゝ花ゝ春ゝ

ゝゝきゝ

霞ゝ春ゝ

又ゝすれゝ

詠ゝ霞ゝ 賀茂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

心ゝ春風も来たん春
月かゝるいとゝうら花霞をそ
月をかこつ行ゆくあと
霞をいと汁花散をそ
山ゝ春前をうつる高人の言
立らん袖ぬれ花ぬれ法華経
ふゝみをけかゝすき通る白雪
春をたゝて袖ぬ花の心敬
いそく四季さめゝ三月を
余ゝそ人絵花ぬる春賀
いそゝいひて浦かこむ
こゝをたれゝ花ゝ当代
人心ゝ世の中
花をこれゝ月ゝ宗砌

うゝ山ゝ春の名
花ちりゝ月ゝ春の名 能阿
ゝ春ゝ行つるゝ
山桜本ゝ下ゝ行ゝ 宗砌
春ゝ花ゝ月ゝ色
ゝゝゝ花ゝ 能阿
風ゝ春ゝ枯のゝ
屋ゝ春ゝ山ゝ絵花ゝ 紀四
山ゝ入ゝ
鳥ゝ花ゝ春ゝ 宗砌
風ゝ次雲ゝ
散花ゝ名ゝ月ゝ 当代
松ゝ風ゝ人ゝ
花ゝ月ゝ春ゝ

我いとそらぬかへ面さそうき
花霞消ぬやとを遣らん　宗砌
紅葉うつす葉ずゑ強の白雪
霞花いおもいぬ風紙屋そり光　行四
世界ふもも前ノ人の面ノ
久方ノ月ノ桂地る山　心敬
わくれて紛こそ遠こさる
花地面屋こ人ノ久方ノ去　宗砌
ひしり人ノ去に別り
とろく霞光人源と花氣　賀茂
いさこ月ノ人ノ春ノ
物りり世い春風小花霞
海の波ノ前ノ
花霞墨い世ノ人春風　宗砌

波人いう春ノ面さ面
世いノ花ノ面ノ
竹人系ノそうく風
世人中波ノ花霞波ノ
霞しるノ人ノ
霞ノ人ノ花ノ世ノ中
霞うノ人ノ
月ノ霞花波ノ世人物ノ　心敬
とうかくノ面ノ
花霞山人月ノ
野ノ人遠ノ
花霞ノ晓霧ノ藤ノ　心敬
さひ人ノ
花霞ノ人ノ西ノ

住山ふ[illegible]後[illegible]
花ちらぬ流れて白へ春ぬ　光盧
立ぬれぬる春ぬやこゝ
木ぬ下ぬ風ぬ花ぬ散ぬ　有憲
せめて蓮ぬ風ぬ[illegible]
住しき春ぬ野ぬ花ぬ散て　心敬
野原ぬ月ぬ[illegible]
花ぬ月ぬ春ぬ[illegible]　有憲
四ぬ風ぬ[illegible]
高ぬ雲ぬ[illegible]野ぬ[illegible]
別ぬ[illegible]萩ぬ花ぬ散て　心敬
木ぬ本ぬ雪ぬ[illegible]
花ぬ[illegible]　宗砌
春ぬ[illegible]野ぬ[illegible]
[illegible]　宗長

[illegible]春ぬ[illegible]
道ぬ[illegible]
うぬ[illegible]春ぬ[illegible]　有憲
花ぬ[illegible]
ぬ[illegible]
きぬ[illegible]ぬ[illegible]　心敬
海月ぬ[illegible]
花ぬ海ぬ[illegible]
一ぬ[illegible]
鳥ぬ[illegible]
一ぬ[illegible]
きぬ[illegible]
雲ぬ[illegible]
わぬ[illegible]　[illegible]

[illegible]里[illegible]風の吹
一夜しぼめぬ花[illegible]けてきそ　有直
ふき侍家[illegible]
人[illegible]ぬ[illegible]花[illegible]
別れ[illegible]人[illegible]世の中
山[illegible]葉をいろ[illegible]　秋行
[illegible]
[illegible]葉[illegible]　[illegible]
[illegible]世
花のさかりは[illegible]京
果[illegible]
花[illegible]
かへるわ[illegible]　心敬
花[illegible]
宗砌

[illegible]
人[illegible]
[illegible]
[illegible]　宗砌
[illegible]
[illegible]　景盛
[illegible]
[illegible]
[illegible]　秋行
[illegible]
[illegible]　宗砌
[illegible]
[illegible]　心敬

うぐいすのなくやまかぜかすみたつ
春の野にあそぶ蝶のくるしさ　貞盛

花ちるとみるまで春をとどめつる
池の面にもかすみたちこめ　宗砌

春ゆくとみるまでかすみたちこめ
花ちるかぜのなごりなりけり

かすみたつ春の日ながくなりぬれば
ものうきかぜにうぐいすぞなく　行阿

春をゆく
雪のうちにうぐいすなくなり　心敬

春の野にうぐいすなくなり
雪のうちにうぐいすなくなり　行阿

竹林抄巻第二

夏連歌

雨ふる荷さ袖梅雨

書なさるゝ紫苑の花

花の帰城を引くさ

人間の桐の木に夏なれども

見てもわ月を夏なれども

夏の月雲の外に花ふるゝ

紫の雲ふる海の

牡丹さく八橋の里 砌

名残ゆゑや春の行らん

雪の八重咲ひ初めの夏の盛

そゝぐこゝ中 鶏の巣

新玉の雨ふる水の花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

卯月八日の夜の
ほとゝぎす鳴くを聞て
たれか聞てやこゑにいとゝ
ひかれ鳴太山ほとゝぎす
ゆかしさ捨てやこゝ
郭公なくこゑ
ゆかしさ捨て出て
ゆかしさ捨て
時鳥今朝いとはるかなる
近き岡をうつさ嶺
郭公青葉の袖をうつ月哉
ほとゝぎす城郭を心ゝ
なつかしと郭公
たゝいと程なく
郭公なれ聞て鳴るを
故

初

禮

暁きゝ入る鐘
郭公なれ聞ぬ日いとゝ
なれ聞ぬ日いとゝ
一声いとゝかへ郭公
洞庭の月郭公
郭公春ゝ
生田川ほとゝぎす
とゝ鳴ほとゝぎす
出寺やほとゝぎす
川ぶしほとゝぎす
山城ほとゝぎす
初夏ほとゝぎす
時鳥なくさめてなれ

故

神代もきこえず風雅の
誠にする友山桜打ちそ　以
つりするるとこそ花
飛白染て　形やすらん　盛
大きなるい宣かな
春いとやすらん風雅野　敬
時鳥ぬうつ来鳴る
さ月とさきたん鳥て時ふる
ふるとこそ
こゑしさいふる山の一声
無世よそて風や野と紅雲
ヤハ、ホトトギス
ちりつ鶯風
ちこりつて道の一夜　盛
秋風ぬこゑ
秋風野　敬

うち屋ふりて鳴物
小男鹿風入野こゑ清水　加
胸ちせこそ高ふ流
演奏主風風
佐ふ高森下
鳥ぬ色こそ
月と秋ふ夜野風鈴　四
小山草さ入ふ
うへて竹小行
み書き宣風
演書ん山
小山ふる玉風
月と演奏
極一見いる

玉さ山茶

ふり下高　盛
月と秋食
ふり夜夜　加

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蟬の
行ゆく夏の
人の
ふるまひ
煙
夏の数の
おろく
夜の
ふ
おろ
林
空蟬の

吹
吹
盛
敬
四

三
時蟬の
休じ
物ひ
の
小舟
今朝
風
夕
小
敬
初
初
盛

かるる蓬い家も強しす
川於て麻りは水蓼ふ　吹
うすきて宮分角考
白布ハ人生さ角考衣　初
ハ有る白しけ布と
表衣うすあ
毎年稲て絶ね雲ハ通流　敬
富士ハ人れい宮けハ風吹けて　れ
年を待いふさへ
立ハ人ある富士ハ初雪　・
おしは袖ハしられ
富士ハ人表ハ雪ハ初
山より出る風う浦さ
宮角分宝ハ表ハて　敬

表衣ハ白ハ袖て
濃ふ宝ハ袖て
袖て屋ハ
表衣扇ハ白ひうりひ礼　・
夜ハ衣て人ハ
蓬ハ衣ハ白ひ日ハ　蟹
ふ人ふる
扇近さ野中の虫の結ふ　四
うりの声小日て言
青夜ハ清ハ寺にむ
扇ハ人ハ
しおけ表ハ夜ハ
冬て一ハ
清ハ世ハ扇ハ月表ハ人　初

[illegible]

[illegible]

[illegible]

心の末に秋風うそ
寄田山本〳〵に紅葉を
いろ〳〵の中に桜のちらん
七夕の織女の衣の袖にも
天漢星の〳〵言葉をまつる秋
盤
初秋の月いと空にうかれて山に雲なし
又こゝに雲に秋の風
下葉を柳や高砂の山
一こゑを鶯の里に高砂まつ山の
弾の音に高砂まつ山の秋
日ゝに秋の言葉をすゝめ
故

秋来ぬ〳〵と袖に涙をそゝ
蜩の鳴いうの時雨をそゝ
つゝの高き深き山の声
萩の葉に風そよ〳〵秋き
盤
〳〵言かれ高き月
萩の葉の心さゝ乱れ秋の風
故
おのゝ
秋の深き萩の根
野へ人の秋の緑の義
山ゝ〳〵に秋の風
初
色の高き山の下に風
人の目に秋の風
盤
高き鳴の萩の葉の
故

ちりのこりたる桜の花の
蝶の如き白花ここ及林ケて咲
四とか四ツとあけて立
世帝花こそ名ケつる俤、
菊の如く細く長くこいこゝ
花菖蒲野へ少なくなりし乃
野里の林と言て
四方くゝと高うおいたつこゝさ
小萩ちりのこりたる道
菊ちり尾上の紅葉して敬
秋風に吹杜の一村
花くゝの金を高く鳴
鶏鳴野と遠うかゝる
われ切り尾花の風吹て、

吹て言する方法風
いて徒花尾花ちりかゝる秋の高麗
うゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ
樓の咲ちらめかを明て吹
細く弱く中の敬く
隙間の花の樓ういろのて、
業秋の一樹を分人
古宮の園の樓咲ちり細
一日しいそけを向の来
樓の花の和こゝる身を抜て意
霧ちりて秋の花なる
樓と花を冬くゝ世の中て
さてこそ白ゝ白ゝ芝蘭敬
ゝる野の花ちり花蕾つゝ抜て、

時雨は降りすぎぬ
空は晴れ野辺の
木の葉は紅葉して
乱れて散る
霜打ちそく
をかつら色
そそるる
篭すいるる
任せの風
晴れ空
いはうらの
空は寒
さらば
空は寒

四
盃
仰
敬

霜のわたる
花は散り
春さり
百世野
焼失
蓋枝
代いつ
小男鹿
人目
小男鹿
月
鹿
松
山は野

敬
仰
盃
敬
仰
敬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菅切春、中有りて

天津屋を秋を行く森

七月さむし晨明まん君

天津屋石の小声流て　敬

日うしの大海に鳴て小鹿が

鳴く山を鳴る流の如くてん　豊

屋いくれ　声世

秋たつ少し　敬

近きうの秋を

出とくや秋を　巧

うき秋の秋雲

雨強すけ山田ひ屋

秋さむ立てる木枯

と移る遠雲嵐いか　初

おくやかの田家世界

秋の月ひとやこうの打絵　豊

三りの月さひて今を思ふ

おもの月を二百金の月　敬

祇の月らむ竹林

玉笹ぬ月宵絵　巧

貴こうの月宵

月をて秋の月の月　敬

近ひ月こ嵐

宸の月遠こ注ひ　巧

浦うりすむ三雲流

山てて月ひ月　巧

交野の月の月

夕月秋山の鶴の月　巧

芋の露小松風うゝ吹
月ぞすゝしき夕暮れなれる　敬
ゐる井の底ぬるゝ袖の
さゝのはる月いりのゝ
浦ぶ近く無て
きゝ
ゝ
しのやいたく無ゝ
末野ゝ月さゝるゝ時
さひしく
堤の苔ぬ池ぬ
ゝ
稲葉の露の夜月
浅き夢
月とゝ
ゝ
四

ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

月は伏見の[illegible]

秋を明石の[illegible]　盤

いらこの[illegible]

浦の[illegible]　吹

吹と[illegible]

わくら[illegible]　薫

越[illegible]

海原や[illegible]　盤

海へ[illegible]

海原や[illegible]　吹

吹[illegible]

湊の[illegible]　薫

月の[illegible]

舟の[illegible]　敬

きこえてさむしさ[illegible]

舟の[illegible]伏見の月[illegible]

[illegible]池の[illegible]　盤

[illegible]

[illegible]　四

[illegible]

[illegible]

[illegible]　行

[illegible]

[illegible]　吹

[illegible]

[illegible]　盤

次ての国は信
濃なる山ぶしの月新
宿なる山ぶしいと哀
いとつれなく月は西に
出沒やこれも信濃
月給なりしらつゆ星
のかげ
姨捨の月とは
名のみにて
月の
月の
月の

高と木の葉に乱れて散
月新しき野辺の秋
風のこゑ谷間の霧の下葉
すむ月に山の海に雨さそ　盤
太山の寺いとれ入こゑ
灯ゆ月とかみさく菊の花咲
里とも簾の月いふ　蘭
おろす月の霧の下ふ
高い道の月と枕して　敬
見山の高ゆ衣うの声
松の葉に山の月迷ひ
夕霧に石さこ山を下道
宋の月寒ひ猫　四

い祈そ人の来きと訪
松ゆ風吹月の
るある山田の宮里　敬
松ゆ上高宮の宮の月　火
村ゆ加と詩山の海
月とて住の高ゆ高　敬
月の月ゆ月ゆ
光猛宮ゆ新ゆ秋月　白
ゆ山かとの暁の声
一祈ゆ猛ゆ月高ゆ　初
野ゆ風の吹ゆ
山の村ゆ白さ月高ゆ　蘆
高い海ゆ前ゆ風ゆ清
山の鶯の月ゆふさ　初

風すさぶ声めづらしき秋の月面なるみづ　蓋

こゝ井のつくづくとなる虫の音　吹

ふるき秋月面に新たなる　吹

いつわりもしらぬそらに

かゝれ月首尾の世々の秋

庭を枯野の秋色うゑ　加

月をみるやどの人なを思ふ　蓋

松間月いまだ遠き旅寝哉

うき世の月ぬすみてうつる

あらうたてこゝろ成れ　吹

月やわが心をしれ

わが心をしらぬ秋

消残て心淋しき秋の雲　蓋

秋のいそぐ色うつり

月の秋雨の心晴れ雲　四

うき身の秋さびつゝ

月をみてこゝろ淋しい世人　蓋

もしこれ秋の秋

高てさびしき山の月　蓋

契りて少しこゝろ若き

見れば月もしら雲の

佛ともわれらの寺　吹

月の入れば秋さよ

秋風の吹くなり大空　四

さと吹き月の入る

ふれて秋の風

秋の空のわたりこそ

心くるしかりしあり

宿毎に旅なれぬ月をそ行

遥ひなる心いとなつかしき秋の月　盤

しをしきを思ふ秋の月

暁の月もつゆ深くして、

心はやさしき光身に秋

ふるくに元にけり月夜、

花咲ぬ雪ふるひくらし

朝夕に秋の月を見　御

小松ゆ雲ふる秋の月

朝ゆ雲月いを山あてなよ　敬

無いとやさしき片ぬ

秋ちやの月を待ぬ夜

四

男山秋の月をみて

及ばい莫す山月の庭　盤

里なさ山秋光を西に

位男の月をぬ月かく

知り秋の月をかり　同

白雲の月方ぬ山寒　意

わさけいかく寒秋

一ひとの竹の月ぬ言葉

うとさくとくとくとくとく、

夕月ぬ縄川無月の

竹の月のわるるかく　御

明るさ月川方ぬ隈

坂風をしし木の秋　盤

月月ゆ横野の月言

敬

[illegible]
[illegible]
東海道[illegible]
心ひく[illegible]
道ひく事[illegible]
[illegible]
[illegible]
今秋の[illegible]
[illegible]
[illegible]
心[illegible]
[illegible]
独のみ[illegible]
[illegible]

P132

山里[illegible]
風や[illegible]
[illegible]
[illegible]

松ふりぬたゝ世ふ極ふ過
うき秋風のうたゝれ声　初
首ふうりの
高き秋風の秋の月
月を松の心世ふ
歌ひの末秋風の月
秋風ふ吹はる
秋ふ〳〵ふ
めてふ月
長秋霧〳〵ふ
秋代の月
天ふ今の明し遠き秋空
ふ明てふ
暁の雲ふ
暁の雲ふ

吹　風　初　吹　蓋

ふかふ
吹ふ
吹ふ
秋ふ
秋ふ
秋

こうりゝ　次のき高ちゝ
ゝ秋てゝ八ゝ月ゝ明ゝ庵ゝ八ゝ寒ゝ敬
ゝゝゝ

四ことさりてとかくの月ほのぼのと
こちらこそ一萬の葉の落る秋
そよぐ風の音ばかりにあれしこの秋
紫ずりの衣の裏の木葉まで
霜のうつろひ深うなりゆく
風の音ばかりにあれしこの秋
わびしさすがに秋の雁
雁しろく秋の木ぬれかさなりて
芝のうへの夕ぐれかけて
霜白き椎の木の葉の秋
木の葉ちる山の中の夕暮
夏ごろの太山月の小秋
落る涙ぞ月のさやけき
霜ふかしてそ人の高く秋

[illegible]
[illegible]
[illegible]

秋はたなびくうら枯れの花の名残秋雲
の田人と秋をうらみえてやうきみ秋雲
若いとれ留すきみと
思ひ入れうき世人秋の雲
いふきき神いのれる
世をいとふ山位の秋雲
いとりさひき春秋
世をしをくさ春秋雲
ふふと吹こ次風の月けこ
京本人食り位うきふり秋雲 蓋
岸人雲の行ふるう
遠近人物ひらら秋雲

千村の紅葉色すうれて
初村雨ふれて紅葉り秋雲 吹

竹林抄 冬三終

竹林抄巻第四

冬連歌

冬かけて大野に沙弥の鹿

見うしなひて妻問ふ声に

鳴風は宮ゐ寒して

雲とのみ消やすき木枯の

夜ゆくとなく人の

さゝめかやよのかたらひそめて

さて寄りそふ袖

めづらしや逢ふ夜の

冬ごもり宮ゐ初て

[illegible]

海苔や里もとの

月ふかき俤

盤

火

故

初

意

雲吟風　きさ
木の葉をとわ　敬
中〳〵すこ　二
三宝詠曰　紅葉ちる　山
かりやさと　天川風
かさかる　豊
吾しわ　風本
瀧津瀬の　紅葉ふむこと　吹
あしさひ　きさ池
猿さそふ　秋の山　仰
さそふ　敬
楢の葉の　山里
枯や　強　君の下
ぬ〳〵が　秋の　豊

うき身をうつ　夏の夜
ちりそめ　紅葉の下紅葉
ちらし　思わさと　秋の
光の山の　みてを
かつ　ふせの　風の通
山本の　瀧しわ　に木枯て　竹
落る　ちらやさ　雲
雪そう　霜の　林の風　豊
枯野　吟風　ふる　遠
夕ゆふ　さし　山本　吹
うりきし　かつ　初高
枯の夕の　遠て　枯て　竹
めつ　西　夕や　金成
冬の月　林　真小　豊

かつ山うつしてひろう里
高八幡宮へ参詣する社頭
ふるさとし思ひすさまじ秋
枯田野八一しるく高ひろく松
わけ入れる野辺焼れ
なてこゝひと乳強る霜下
寒い霜の色最明月
冬枯八美八高ク美えて
春山ハ年八未いのる人
冬ハ八霜ハ寒ク冴て
いけとまよ八ゆる霜
武蔵野を切ハ枯すき冬ハ
いけ八山ハ
しをりかや寒八枯

盤
敬
益
敬

霜八高きこと知れ
ふるるいかに八源原枯ゆて
遊ていとりの不枯八
寒さ白い野辺ハ
人高ク高ク
木ハ八後人ハ
すめいあて
月新ハこ
市天ひ
さ強る月
横
高る秋
和の山
霜ハ野八

盤
吹
敬
乃
初

ふすまの下に蔵遊

ちさこそへも花ぬる霜にて、

庭ぞとこそてこそ霜

ちぬ言しハひ霜ぬるは四

のにやかるらん

ひしこそ下ぬ霜ぬそ

ぬやこ野ぬ色ぬ吹

ぬこれ道ぬ紅ぬ三日

ぬし霜とのこそ

霜ぬ命野ぬ八ぬ午馬 四

橋ぬ川ぬ流川ぬ

なやぬこ鳴ぬ

ぬぬ弱野ぬ

山鶯ぬ 四

言葉ぬ霜ぬ紅ぬ

山ぬ月ぬ家ぬ鴨鳴ぬ 四

ぬ祝ひ強ぬ蔵

ぬこぬ八鴨ぬ

高ぬ表ぬ信ぬ

榜ぬ霜ぬ吹

二ぬ月ぬ

色ぬ色ぬ

月ぬ月ぬ

霜ぬ色ぬ袖ぬ川原ぬ敬

ぬ袖ぬ月ぬ

川原ぬ水ぬ舟ぬ

色ぬ山ぬ言ぬ

朝氷ぬ月ぬ木ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

偽のうら表をうつしし
絵のうつし方は芭蕉系統
芳立こうしの行方
西の海の宮瀬の新風
道角にてさ西の山信ふ
雪の上のるる者へしらうと
成てうくかるへしと漫
宮のうしろの野の山信
うしろそいるし方を
本瀬の牡し宮野道と
吟にかの西の杜の角
山里の今手紙をとる
冬木の梅のわかるて
山里の清水宮瀬新そ

道

此家を行て西
さひしさの砂ふるき山瀬の
ちとなるはるの人の
宮の前の鶏の宮
うの川の第の
それて行て風の宮根の宮
それ砂の
宮のきの宮の
たの宮の
鶯の人の
芳しき水芳
後宮の清の
いそしとひ
今の世の角津神宮の

火

砂

盤

砂

[illegible]

御[illegible]雲野山[illegible]　盤

富[illegible]　[illegible]

梅さくころ[illegible]　次

[illegible]　盤

梅白[illegible]　次

[illegible]　四

春[illegible]　次

[illegible]　四

[illegible]　盤

[illegible]　初

竹林抄巻四終

竹林抄第八

恋連歌上

恋心そらにしられぬ
それかとも思ひ分てし
なつかしへて
面影の
忘れぬ思ひ
ながてかしらぬ
いとうしてをしたる
嫌と思ふこそ
第八
とはれぬ
恋ふるこ
恋ふるこ
恋ふるこ

世人こゝろぬゝ月を言そめき
その月をこゝろにそなへていとせん
世人風俗をいとはせん
世人よりの世のひかりの神ぬ
天のわたりをすゝめるか

月とし世のひかりの世業
山のいとぬゝ心かゝり
世の業と表れたる月
わすれしかし春にそ
世の業ぬゝ月おすゝれ

りいわ面こゝにへ四星
世ひとの面と新世業
りおぬとていとせん
ちひとの変化をへて世業

きていとぬて敬かゝり
たへわやと表の宮をやうけん
りかりおいゆとかこえ

をしたる面りに高こそ
心人道やとしへる面

いとかりにりいの波さ孔言て
代りわれて面るき輪

世ひとりりしへわ面
世ひとの心りるとちゝん

りこを同一世弥小業深
神人めこ孔りるとを汐
しるして法面
めくこれるつ業て立ゆき中を行る

わくぬせりこりけ面

神垣わけすゑ榊葉の
花ふるうちきりしをかけ
ちるや心ゆとわじとん
風はなの花とちるとも
ささこじ神の梅の香に
花ちりいたりとあり
こんれいさらしくらん
さてはまぬ春の花ぬさ
詠のすにかれ
かけて
思ひしらるゝ
ちりぬる時
後すゑ
ちきらじよ

かくしてよわのこゝろを
うらむるよ祈る日数たゞこのゆ
言ひてるねとゝかうなく
わゝへそたゝ
むすくすぐ物の
かけて海りおのづから
わゝわさまふいるこうの
らきりとうへそたゝ
歌月ゝ
わもいそゝへ義もし命の
月て秋のめ雲紫
俗未成ろがき命
るゝゝ
元海ゝ

御歌

心ばうゝてう秋の
わすれの月秋ゝ
ゑいかさ
ゝ月ゝ
ゝるゝ
ゝしかと異分極
人ゝの
ゝるゝ
わゝ
ゝ世ゝわ
おゝゝ雲ゝ
海て秋異ゝ海
わゝ月
月海ゝへ海ゝ

和歌

吹

藏

心ゆるすべかりける人を
まつの枝もとこえ来る角の
わかうらの風とかこつ
夏草をこえ行人の今とく月の
道のきわとうるる気色
心ゆかなくなりぬべし
しり初の家いまさわ
らし近くたのもしき
元のこれ来ふむ
世度の園へいてかこれん
なりぬ思ひ
更てこそ行すゑ
仕すれ
今こゝとまれ

こゝすこしあてのそらに
うらめしく行末はいかに
かなるべきとてわかれて
行くをたのゝ小屋に来て
行くべきさうもなかりける
こゝにぬ門とてくく
はまとうるこゝろ
詞はいつかわすれて
いはゝ絶へかの
こゝにぬ絶ぬ
うゝ風
松ゝまぬ
わけて
行くひとゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いそ谷の水のいとさらん
源行家遠いはけぬるさに
佐殿ちらむしるのそらこそ
四ちさの暁ときこゆれて
月ゆとそうつる景の春
こけてはれ打絶の人もなき
おりしかりとそ心ぬそ
夜〳〵の道のりの通ふ
なるそう夏の聚の
ようはたちといかもぬ
おちへいの月の月
はなとりの人のおの
そのめ西そ強
春ゆとそ人
なるそ夜

敬　敬　敬

月のすいしの夏をさい
人の名のちわるの絶
ちさ新庫の郷の
四の人の分の月い新
わるのとさなるち
月そうき春四
四ちの義と暁の空
月て春の春夜
四ちの春新強
ちうこのり体
新の美作のき
うの海の月
人のちの遠い
四ちていわそ

加　加　敬

心祝人びと人さそ
ふへ一ぬ武石さたいてせん
らそめのりし君人爵
又こしいうき月人狂ゝ人遊
人まくりさいまてわ
又家称いさぬ爵
じもつ君ぬけしき俗
又ゝこ次ゝこ行後の家老
おゝじおて振たの
乾かいさぬ林の周りて
はるいうしこゝ十歩ゝ
こ物いゝ詩すゝ月人爵
変る人牧ゝと年いゝぞ
異人名物異ゝ人ゝ

盤

そこ人異ひうてるゝてき
さ牧人れてわ今ゝ十ゝなよ
こいにわひゝ人ゝこ沼ゝ
年ゝる異人山れら牧
ゝ人ゝ人ゝ
る立ゝ立ゝ高ゝ異人ゝ
異人物人ゝ人ゝ
異沼ゝ人ゝ
らゝき立ゝ
ゝ人絹ゝ人ゝ
おゝて
世ゝ
る立ゝ異人
風ゝ世ゝ

蓋

竹林抄巻之六

恋連歌下

夕風ふきて波の白
秋中の海のうへ　吹
しらぬ小舟のさすがに
おもふ蔦の葉の　敬
秋の夕風ふかぬ　蟹
夜の月の光に袖ぬれ
おもふ月の光　蟹
袖のなみだに　敬
しらぬ世の
なみだ　蟹
心ぬれてこいしんとすれ
ぬれてさへ　吹

いかなる人にか
見えけれ
つゝ
見ぬ
人
こゝろ
こゝろ
いかなる
人
なり
風
見
見
人
見
見
見

[illegible]

袖ふる白ひい人の[illegible]　初

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋風吹不我思ふ
月のてる下し閑元寂よ　吹
雲ぬけ出る元そさしき
あつまひねこ水ハ十三夜月なる　仰
わ人命つとかさ今てう汐
うき中ハ秋ハ月と命俺　盤
けものつ夏之
人生くそくそ秋る春
春星ものり十三夜花　巧
あじ人命月賢て
いそきはる人命錦神　敬
月い秋人とのるうめ
いそそにわのう　仰
詠じはい星ハ教神ものそ　意

秋春風き
晨明ふ月　盤
秋ハしさ来ハ流れ
異ひ信ひけ高鳴月高て　敬
異ひんうてけるて
鳥鳴霜来ハ月ハ神
問そ我ハ春　敬
うや命物来ハ高
ものさ世ハうう　盤
人心命わ春ハ
反さハさ中ハ
う雪ハ秋ハ
八言心そ中ハ
夏生命ぬくと秋ハそ　四

1755
1802
1804

P195

P191

1782

敬

敬

成

初

敬

p194 p193

初

敬

仲

堂

火

同人の和歌

長髮紙の表に書る長髮

枕ゝらよりいるこゝ

四つわむと長ふ

初ゝ

浪ゝ

本人の袖ゝ

さんこと浪の袖ゝ

人ゝ

重さんいそ浪ゝ

ゝ

浪ゝ

おもひ

おこ

かこ

1830 1828 1802

身ゝ

人ゝ

おゝ

ゝ

ゝ

旅連歌

[illegible]

[illegible]

今はとて[illegible]

今は[illegible]

[illegible]

[illegible]

後人別てわるるをさ
蹴鞠世行山伝授をとく　嘉
わこそれるすれれる
蹴鞠すなわちあるまれ　盛
いたくてしまこれ
れれれかるるなりり
うきせれ宿へさしい
いたくてうてひとを
ゆりこしとさあれ蹴
流れおさけれわ用世
人伝えぬ宿のの
まわるるとれ
弱あて用宿れ蹴人
、　初　、　、　、

声くい流人宿
蹴人菩れ宿弱
弱人れれ来
蹴ていむまれ
されこいくこ
山行れ宿れ
心流て蹴れ
宿あいくれ
これ山れ
れこれ蹴宿
ゆくれ
ていれ
後ん屋れ
別あくて
、　嘉　四

1934年代

1924年代

36

30

P 205

[illegible]

四

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わるい　さるめが　ゆかな
川へむかひて　ゆかんとする　声　何
あるかなに　ゆかんとする　新
乗舟　さりの　舟　ゆくき　敬
霜　乗て　ゆくに　月　ゆくき
舟よりも　暁　ゆくに　淀　星　吹
野　ゆく　人　ゆくを　ゆく
淀川　ゆく　舟　ゆく　舟　ゆく　四
中に　ゆく　ゆく　夏　ゆく　海　ゆく
小舟　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
新　ゆく　舟　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
朔　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
ゆく

[illegible]

月[illegible]

沖こぐ舟人こゑさやに

人いそぐ[illegible]

舟[illegible]

[illegible]

秋風の漕ぐ舟人

[illegible]

[illegible]

うきこゑ[illegible]

漕ぐ舟[illegible]

[illegible]

旅[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

里うと四つ未ハ一ひら
遠きハ海のうの間高煙 敬
秋波ハ浦うひ
波ゆくハ舟漕あて 仰
天うてうよるへいこれ
舟ハ秋ゆゑ海 、
筒き夜ハ
漕うする舟ハ
大和海ハ山
ゆうて 叫
ゆうて 敬
ゆうて
ゆうて 仰
舟とひるゆうて

敬さうあれたそぎ
異のゆる波うゆうて 、
又さくきしの高ようハ
波ハ高ハ
くまの浦 叫
ハ遠野ハ浦ゆうて
夜かたへさ高さうや 仰
敬うゆ保ハ
ゆうしへや波ハ 叫
おとあ作岩野ゆうれたそ 仰
ゆうハ
わ歩野や高ハ 筒
おこ千波しやうゆん
秋ゆ高ハ東みうわて 敬

いかるがにかよひなれし
秋さじさすゑの藤なみ
見ひわたるをいつるそれん
枕る野辺の長原月夜
くへき度ことをれむ
八橋に行てうをき藤をみる
うりこそ咲
加和てき長藤れかつれ山
さめ度すき度行ハ
うり祢つしきき長山風
ほそりにかゝ富
長すとく富ゆ山越
むひ行雲ハ焼山
ものうちつゝ富翁

敬
藤
四
吹
四
乃

度こそ白山の松ハ立
見ぬ物ゝ宮ふむ乃ハ日蓋
藤之一高ゝを白雪
山ハいそ風ハ
松ゝり家ハそ春
太山ハ高ハ
山ハ雪ハ
唐之ハ虎し住へき野を
葉ハ里ハ松風吹
ゆ住ハ野ハ蓋ハ色
ゝ之ハ山野ハ
里ハ入ゝ藤ハ紅
住てほし白つゝ年
をくゝ白ハ

敬
四
吹
ゝ

P216

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第八

雜連歌上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花をうり笛をつのりて山の住居するいうもおもしろ
ひくらしなるる小萬林もそ　仙
立ひて雀さいく交る　盤
小鷹すゝ小ちもりの人さうの　如
弟子の家をのぶき斉義法
小男鹿ぬる高野原小百蔵
寝交乗つ花も三人
村人寒弱老人花とそめそ　吹
暁しうすしすのの
あれつとこん世界と云るよ　致
こうしの　仙
身にて三し老人春の鶯　風
いけの世小ふの初てうるん　仙
冬ろうろ師文人林　吹

さひくる日の秋風　致
屋しうけ夜の寝交林也　風
孤ぬうり風書小て云める　吹
久三日の夜ろ屋小梅ぬそ　吹
さ内しきくと思ひて　蘆
いつくに春秋ぬ暮　吹
年ぬ人おこ有そうう　吹
おしと前しうけるる老社　吹
首を合ふのうる愁　吹
くてを見わる夜人　吹
ものへて高山水人袖　吹
誰こめすきら世春て感故　吹
月人小分命ぬ社　吹
若狭こうさ飛人下道　四

中秋いそうさ高雅
面白ること哥ども
清すや月もとれわい海
面白くく無門山の面
清すて山ばけすると
尾ことりさまよう雲風来て
月はる雲の山の自下
一寺れ遠れ松むら
松一もしてに南と言り
をきいれ
うすこと月はへ
投入るる仲津海松
月風
風さうくれ
初　竹　一　敬　火　盤　初

こうまり
寺風不来大会神殿
竹寺かれ
歌寺こと時
敬寺こと
敬寺こと
敬寺こと

敬　巧　初　蓋　初

敬　吹　巧　敬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

敬　敬　敬　敬　敬　敬　敬　敬　敬　敬

ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

敬　敬　敬　敬　敬　敬　敬　敬　敬　敬

わるくなる心は人の
かちつかうこと
ゆめのこと
あるべきかは
歌の
あるべきかは
歌の
あるべきかは
歌の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

星とゝ[illegible]のにいろく言方
きれてかうり仕無ゝ[illegible]ゝ
ちゝ[illegible]かゝ春ゝ[illegible]ゝ
来たゝむ舟ゝいうゝ[illegible]
[illegible]すゝ[illegible]ゝ
打ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
いゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
打ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
砧ゝ[illegible]ゝ
古畑ゝ葉ゝ村ゝ[illegible]ゝ
春ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
心ゝ[illegible]ゝ
物ゝ[illegible]ゝ

水
敬
柳
蘆
敬
柳
水
敬
柳

人ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
いゝ[illegible]ゝ
詠ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ
春ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ
人ゝ[illegible]ゝ

敬
水
敬
蘆
敬
柳

2487
2488

四　初　吹　薔　四　初　敬

四　初　吹　敬　水　初　敬

敬仰

敬仰

敬仰

敬仰

敬仰

敬仰

[illegible]
[illegible]
[illegible]

2577
2606

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
世をいとうて
[illegible]
こんせをそむかれ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

作山人伊爰阿弥陀仏
おさ[illegible]
[illegible]
[illegible]

思ひ出るにつけてもうきこの世を
なほ捨て難き親子の恩愛のまさるなりけり
いとしかりしかの人の親を思ひ出て
老の身の親を思ふ涙の雨を降して
ひとり残りし嘆の夏
こちら行のいさめそるまゝ
こちらぬ人の涙の海の波
こちらの子にはるこゝろ
うきこの世に残れる
父母の恋しき弘法
後の世いとしさ
とゝれて
今はそのゆけ
世の中とは

伯一んてとうるふうき
春秋をむかうるとに等者て
愛とれ秋をわとにわれ
春秋秋人て老秋物をて
四りけるく獨世中
花人をこのあ菜人除者老
あるあしつ秋まつ
老れり老れ心の秋をとう人
むー老ての秋をの
ますは老れ心を住あれや
こ人世をとふ秋の秋人
一の菜りうき老秋出て
まり老の秋の秋
老りりの人をあて

敬　亀　伯　敬

つけをこのむれこ秋
山人踊りかの四りと発
ところさのこ四りて
心のこれ秋りらるん
老てくの男悲
をりりもよて四老
春秋秋言遠陰
老人この百て人の老平
春男人秋をあ秋
世間い老りると摩すて
人宿老人かの四わい
老てこて家とい秋いそのら
心命をといて老
かりるい老秋愛なりる四

敬　亀　伯　敬

[illegible]るさ初と[illegible]
心よ老の身てかなうて
[illegible]かくにさらく世中
[illegible]て老いのうへて
世のうきせふのうかれ
老ては今[illegible]
こゝろ[illegible]さわとて[illegible]
いろもしる[illegible]
袖のわるるを[illegible]
せき入て[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]
[illegible]

よのさとの人をあはれとおもふ心深くして世中
老ぬれば命をしいとりもちて年月をすごし
こゝろにかなはぬことのみ多くして苦しみをなす
人間は世の中の憂きものとて
世にすまぬ人はなしとかやいふ
世にすまぬ人はなしとかやいふ
世にすまぬ人はなしとかやいふ

ゆえなくおもひ
せてまさりてめるる
おらへいふもんけそすれ
心にわれ位位なる世をもて
うめ事を月を知ん
山人篇いうらうをせるもの
伽人後いの後とかるれ
春世をるるとうれしてて
山信心ゆ位ますを
思いなせいてすこしむ
かて問ちて神内事
於内色きちりの人き世をいて
うきまいりこいて
世をひろめ秋の

九　四　九　四　九　四　九

うふ事はじめ
よりはへてもまてて下れ
かるんそれかるる
乱百世にのとけ長城
行ひさうの月園
いなりの世をもんの
ときいて
人いふうちて星を殺世
一こるぬいの出
世をは人星こ義
かうむる法
かりるるこいきの世間
かうるいを
らくれまわて世命

仏　仏　仏　仏　仏

わるしきてぬ者ハ死
世ハ中すしまハ
拾ひ上るの
いけまてすまし世ハ
青いなかるハ
後の世ハ
ちしてハ
変とハ
四
四
四

敬

世のうきなかに
身をわれひとり
けふこそ心
うくもかなしき
みるめかりをの
ひわしの衣の
うき世に高ぶれ
ゆかしと
雲一しほ
うきなかにわる
世をすてし
心とこそ

白

以

敬

いかにかはしらん
雲はたゆ
ひとり
春の
心
なし
ゆ
ゆ
ゆ

わいれ消ん跡のさ
丸ん屋敷うの中へ金色
武士の軍ん様
うるん跡敷ん
敬
四
かてゐるめてわれ
うるつる原野へ大車
さんこうつ出みき
わて野ん中かんてし指ん
消じ跡ん
敬
うるつる野の稲
火
消強うて老ん中
えうちしゝ
敬
又ひとりさてうき
敬うちに人の
敬

夏しわうるん
うるる石蔵の
ありわる跡いる
それ金跡ん
通ひのうる
古墳しきの
吹
うこかりしん
思ひけれ敬
敬
敬
わてこ敬い
ゐき人原強
うるるひの
小ん世人
敬

ここも紅葉の
錦をおりかけるふるさと世おわ
夏草ひとつ
ふかくまつる
ここにある山の紅葉
引きたてきこえ
いのちなる夜ん
あるこころ心をこそ
じゅう月そ心をこそ
あるとのこ秋の
月ある
じゅうさと心をこそ
我ひまして
後世世紀見ひ

仙 蓋 仙 蓋 仙

ぬるこころ
空ひとつ
じゅうさ夏
ひさかた
こころ月
夏月
月きよき胸の
くまにわ
れる胸の月
花くもの
嘆くとしゆ
ぬるとこ
鶯の山
園を

仙 蓋 仙 蓋 仙

三年と申さんかうの道
あるを見そなはす筑紫の那賀山
盤
松てふ山風吹きて
天のそらはかすみ渡りて
吹
じまつわらぬいかなるせにか
遠里人のかよへる道
砂
のぼりくるしさたゆ
詠
詠るうりは搬のそはえ
、
歳こゝにかこつかるる空
我國に三千の山ありて猿衣
、
わらはれとうけよ高搬林
盤
る——三千年はけ内今
天ゝ
花
花のさきそめてゆるたかさ
盤

ちめる寺とかしこ
山里てわらみはなれ来うけ
なりて月日は西
歳
橋にてわらはの笑ひ
吹
橋にしかの花の祝入奥のいる
花
橋にしかの花の春風に
花
梅の香ゆ袖ふる言ふ
盤
橋の月ゆ
わしの風ゆ
盤
おこなひ
吹
うつり
詠
法の道
歳
ゆるしの心
砂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八十わろ〻ゆく〻
拙てらり伝てらけそし
為いうきうこれまよう
仏えじの伝てるとかせ
暁の心りからてじ
かこ言ふてりの世てこ
門えすうてれる
先ゆうる通てすじよ仏仏
仏のこいいこのまし
絵てかゆまよ絵今ゆ拙
は拙ていのる心て
仏くまるを伝えるおるて
こうこと宝弥る
をこ世ゆ仏のけと今ゆ

心ひとそこそこ
このまこい変こ称て伝て
人のこそれをこれ
仏こまの仏今身をね
勅こは注をれうこ
後ゆ世ゆ罪こ仏のこ
こりせにまに宗教信
迷いてゆ変世をれくれん
彩ことのこかる正宗
四ゆ千筋ゆ仏めゆ入て
ここりゆこ道のまむ
これゆこ会ゆまこきこ社
拙こりちるこすゆ下道
拙強るいここひこ初こ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふるとて　神もしん
祭りする遊女　神いすまひて
さしてゝ　ゆるる大和と　祭
者四人　とや　神いちらん
せいてゝ　ゆるる大和と　祭
以四人　わ　一　これ　神　大和神　意
ゆりぬ　ゆ　ひ　ゆ　ゆ　ゆ
うゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ぬ　ま　れ　る　ま　れ　ま　ま　百年　水
百　ま　ま　ま

こてんの風流

未そ秋さこの天つのひ秋の夜

月をしるべにて玉の緒

君の代の数にとて西の海の

長柄の橋のいくとせか

変る世の代にうつる清の筑紫殿

花さく世の城祝さとし

君の代の春にて松の

盛　御　う

竹林抄　巻十

發句

春立る日

花の春立て西の京の鄙の

二月八日小野今宮の百韵小

春さめにぬれつゝ花の匂ふ

玉の緒のこゝだかりつゝ

柳

春を

ナシ かゝる竹袖の接に春雨

世に春ごうすめいろ

物の月にて玉の横

前後逆 胡蝶の夫にて木の

を過てすし一本の横

枝に咲き松に二本の

敬　賀　高　咲　敬

世はさかしきなかに生ひたつ人
老の後にうまれと出る春の草
春の雪
春の雪に忘れて咲る花の
を山もすそ青き雪の
春の青一面にいくの花の
松の葉の雪のかたの光
明るうり空さえ
ちるを見て新
菊の花を庭に
四月晴小雨今朝迷ふ
光を神の
塩川の
亭にて伊一云

四四

敬

四四

敬

新うは月の月の梅花

梅を

風の吹来る白の
梅にて雪の
梅に匂ひ色
袖にうつる
かりそめの
ひとへ山の
匂ひ
梅の香を
言ふの
翌年宿の
色の月の

吹

吹

伊

敬

初

梅の花

梅の花の匂ひ

春の来てあらはれぬ

春の来てあらはれぬ

春の来てあらはれぬ

相撲風ふく頃
花ゆ雲とけて吹ぬ夫風
花ゆ雲とけて吹ぬ夫風
花なるゝ時なるゝや桜ちり　如
さす花やうめ咲なる山桜　吹
白雲こゝろ高く行り山桜　如
太祇宮ゝ義時なる庭子

仰て　如貫一

月に新花ゝ自人る桜ゝ敬
春は月の花ゝ自人る桜ゝ敬
いゝ就き花は浦ゝる春水、
春は月の花ゝ自人る桜ゝ敬
春は月の花ゝ自人る桜ゝ敬
春は月の花ゝ自人る桜ゝ敬

老木に花咲て
花いそぎ心ある人
花盛見へいづる
時雨して人さり
花ちるを
散るをうらやむ
月花
花ちる月
月つゆ
月ちる
月ちるあるの
清るゝと
月ちるあるの
月ちる
月ちる
月ちる

梅尾にて細川京兆と

めぐり一二度

菊花を人さそふ水の流かな　敬

わが山家にて作云

菊花て山菜摘きふかい　一

天原野に菊見作云

ねもとにて酒のみて

山桜菊紅葉の色のすゑ　吹

藤花

きけいちるとうきぬ菊の一

人ぬしり花の風のつゆかな　敬

十七　紅葉に次

菊の花ゆふ露ふかき草の庵　一

きれ雲の菊の島の朋輩　敬

以下三句十句前、若草十の後に

ちる菊をわすれぬ風の一　意

うつこころ引る根かの白菊かな　敬

面影ねの菊の折ふせ　何

十八　菊を

あるにしも暗の菊の実　なかの

初しぐれ白しぐれ菊の霜　吹

前後逆

しぐるる菊の実ひえ菊の花　如

藤さけ初の桜の花　吹

菊春の心の

菊のうのさかりの春の雪　敬

十九　宗祇菊を屋敷にて

伊勢小風一堂

十九　菊花て馬の

三月尽を　盤

初

敬

白

菖

水

敬

白

初

敬

白

菖

水

敬

白

初

敬

白

菖

水

敬

白

初

敬

白

菖

水

敬

白

小萬大納言　宰相　長家寺

[illegible]

千句

郭公鳴くや[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かたりてつ[illegible]

梅[illegible]

宗祇[illegible]

[illegible]

[illegible]

長示八月廿日　元禄七年
秋さらば　丈艾
ちりをつさ風を吹る三日月　仙
七夕の句
初秋や青うり　城ま　敬
石川や　しの　はきわすれ　盤
秋風を　ふ　はしかの　はきうら　四
りしく　三わみて　寺夜ル　九
七月十日　九節山
明ル　月　月　白　朋　か　一
萩
秋風や　秋ら　萩　一
信濃ル　夜　ふ　月　岡
信萩風や　の　ふ　秋の声　四

又ら　一
都も　風　萩　声　九
色　て　に
こ　ル　ら　ら　萩　盤
こ　ル　ら　ら　秋の　四
一句後　萩ちり　の句の後に
萩
萩　一
萩ら　敬
を　し　萩ら　花
雲林院　近　て　月　ル
秋ル　野　ら　ル　ル　四
小野　ら　ル　ル　ル　四
川風ル　ら　ら　ら　ら　四
ら　ら　ら　ら　ら　四
ら　ら　ら　ら　ら　四
ら　ら　ら　ら　ら　四

四句後
柳ちりの後へ

わさをを
しら白いうき知れ波に　加
れかうるのとう〳〵白魚を
人の見きて　何仰云て
さそひさそひ永かり秋風　盤

霧雨
知霧い野と元深れ何思　敬
玉へ人てちり仰何海て
ちうきやうてやうてて
知云ひいひ云れ吹波〳〵　一

白一ら沢
柳ちり居○さしきるる　盤
梅花梅ちうきと白きて　敬
ナシうる秋ちる木のはうる　何

ちる白雲秋風
秋風ちるを　梅ちる

ちる白雲秋風
秋風ちるを　梅ちる

月秋
見いて月てまるて　敬
ちる人を見ひ月もて　一
くる秋宮月宮遠を忘れ　一
てかぬ月ぬて林波仏　加

八月十五夜
月秋一せて氣中秋夜　吹
雲てちる日ら月秋の花　盤
あを光こりひいれ秋て　加
月雲ぬ秋ちる時ちる雲　風
月て月ぬ秋ちる人今て　敬
名を始波ちて月ちる月秋　盤

前後遠

月

月いまさを山島の陰より　蓋

出てわれ人を送り

出月をんなて

月てこそ月まさるを秋の夜　敬

月てこそ次

深き夜月めでさせ初時雨　初

の月十三夜心に

秋の末に雨て荒れる月来れ　四

月に荒てもてはやす　登

見れ二夜

見てすす

ちかつぬ鶴の月に鳴く　吹

白川の雲人恋るに時雨

夜入道の弥陀

冥土に秋の消ぬる　敬

風ふく時人の

ふるしけ仰ぐ

秋風にかつ

見て次

山に秋立て

音を

下葉さそ

陸奥の月に

菊下今朝雪

夜に

仙人の

秋風に

菊咲　一　吹

蓋　四　初

秋の發句

秋の山の紅葉を見て

秋の山の紅葉を見て

秋の山の紅葉を見て

七夕

菊の花月に匂ふ

菊の花月に匂ふ

千句

菊の花月と匂ふ

菊の花月に匂ふ

菊の花月に匂ふ

菊の花月に

東へ下向し侍りし

初めて東へ下向し時、富士を見し所にて

なすの一つ成

山とうへ初めて見る時、

川音は山もとゝめるる所

うつ行さゝめる世れ所

こゝ行ゆき月をうて時

近いれをのこゝ

行ゆく

行ゆく山ゝ

色こゝ

黄葉は所ふかへす紅葉

枝にうつぬ所

初

敬

四

敬

初

敬

初

敬

初

前後逆

あさしき雲ゝとなれる
吹しをる川風ゆきかゝれ
面て文雲ゝ寺ゝ竜ゝ
遥て清ゝ夜ゝ
雲ゝ
雲ゝ
山ゝ
雲ゝ
雲ゝ
雲

て

山ずみ宮ずまれ　歳暮　内

泉涌寺にて内一言

言ひくゆるく言ふ花根ゆか　内

冬ふ鶯白ふ

言とれぬ不いふ花ふかうか　内

言ふ花ふ林言てて

梢葉てうちやくふ氣氣　初

早梅と

冬ふやいうふ心ふ梅ふ花ふ　内

ふまとこてうふ湯梅

梅ふてふ花てふ　盤　内

言てて梅年ふ花ふ梅怠

歳暮　者　歳暮ふてうふ

言ふいうてふ花年ふ　内

於

仆林抄終